2004年発行の『新しい歌を主に歌え』（いのちのことば社）収録の私の論考です。
これが、今回の３本目の講義の下敷きになっています。ただし、『教会福音讃美歌』発行前の文章ですので、『讃美歌21』がベースになっています。また、一部データは当時のものです。

「ティモシー・ダドリー＝スミスとジュビラテ・グループ　–英国における福音的な讃美歌の創作活動–」

中山信児

１　ティモシー・ダドリー＝スミス（Timothy Dudley-Smith. 1926-）

ティモシー・ダドリー＝スミスは、現代英語圏における代表的な讃美歌作詩家の一人である。英語圏の讃美歌集に収録されている彼の詩の数は、現代の讃美歌作詩家の中ではヒム・エクスプロージョンの代表格であるフレッド・プラット・グリーン（注１）やブライアン・レン（注２）と並んで多い。日本でも『讃美歌21』に３曲が収録されている（174、201、373番）。

彼の讃美歌詩の中でも「あがめよ、わが魂」（Tell out, my soul）（『讃美歌21』174番）は、現代の英語讃美歌の歩みにおいて大きな意義を持つ作品である。 この曲は、彼の作品の中で最も広く用いられている讃美歌であり、この曲を収録している讃美歌集も50冊を越える。

この曲が書かれたのは、ヒム・エクスプロージョンの発端となるダンブレイン協議会の発足より前の1961年である。Ｊ・Ｒ・ワトソンは、この曲を「爆発」（エクスプロージョン）への「起爆剤」であるとし、「この曲の成功は、伝統的な形式の新作讃美歌詩であっても、それが良いものであり、良い曲と一緒になれば、一般にも受け入れられるということを讃美歌作詩家たちに示した」（注３）と高く評価している。

この曲以前にも、英国では20世紀教会軽音楽グループ（The 20th Century Church Light Music Group）（注４）や、フォークソングで讃美歌を作ったシドニー・カーター（注５）などが出て、伝統的な形式にとらわれない新しい創作の試みが行われていた。しかしながら、20世紀教会軽音楽グループは、讃美における19世紀スタイルとオルガン伴奏を見直し、世俗的な軽音楽に着目しようとするものであったが、それは歌詩よりも曲についての変革であったし、シドニー・カーターの作品は礼拝で会衆が歌う讃美歌というよりは、ソロで歌われるフォーク調のものが多かった（注６）。

その頃から、偉大な讃美歌作詩家アイザク・ウォッツ（Isaac Watts）やチャールズ・ウェスレー（Charles Wesley）の伝統を受け継ぎ、かつ言葉と時代の変遷に対応した新しい讃美歌詩の創作が求められ、教会内でも、そのような課題が話し合われていたという。1940年代に讃美歌集の編集に携わっていたエリック・ラウトリー（注７）は、当時の状況を「（会衆讃美歌の歌詩として）使用に耐える新しいテキストを見いだすのがどれほど難しかったか、よく覚えている」と回想しているが、これらのことは私たち現状とも通じるものがあるのではないだろうか。

ダドリー＝スミスの「あがめよ、わが魂」は、まさにそのような状況の中に生み出され、その後に続く爆発的な讃美歌詩創作活動の先駆けとなった記念碑的な作品なのである。

（1）生い立ち

ダドリー＝スミスは1926年に英国のマンチェスターに生まれている。父親は詩を愛する学校教師であり、キップリング（Rudyard Kipling）、テニスン（Alfred Tennyson）、メイスフィールド（John Masefield）、デ・ラ・メア（Walter de la Mare）などの詩をよく朗読していたという。父親は彼が11才の時に亡くなったが、その死は彼が献身する上で大きな要因となった。ケンブリッジ大学では、ジョージ・ハーバート（注８）やＧ・Ｋ・チェスタトン（注９）といったクリスチャン詩人に親しむようになる。後にふれるジョン・ストットとの出会いもこの頃である。

幼いときから詩とその朗読に親しんできた経験が、ダドリー＝スミスの讃美歌作詩家としての経歴に大きな意味を持っていることは疑い得ない。同時に、英国においては讃美歌詩というものを、英詩の大きな流れの中に位置づけることができることは大きな強みである。

1959年に結婚した彼は、牧会支援協会（The Church Pastoral-aid Society）で働くようになる。この団体でマイケル・バーンと出会う。この出会いについては後にジュビラテ・グループの章で触れる。

英国聖公会の教職としては1973-81年までノリッジの大執事、1981-91年までテットフォードの主教を努めている。

彼は、合衆国・カナダ讃美歌学会（The Hymn Society in the United States and Canada）のフェローとなっているが、これは本国に活動基盤を置く英国人としては稀なことであるという。

（2）福音的な交わり

本稿でダドリー＝スミスを取り上げるにはもう一つの理由がある。彼は英国聖公会にあって福音派に属し、ジョン・ストット（John Stott）、デレク・キドナー（Derek Kidner）などとも交わりをもち、聖書同盟（Scripture Union）とも関わりの深い人物である。その創作讃美歌詩も聖書信仰に立った福音的なものであり、中でも聖書のテキストを直接の題材とした讃美歌詩は彼の得意とするところである。後に触れるジュビラテ・グループに属する讃美歌作家たちの中には、彼と同様に福音的な信仰に立ちつつ、意欲的に讃美歌の創作や讃美歌集の編纂にあたっている人材が多くいる。将来、日本の福音派から新しく讃美歌集が出版されるとすれば、彼らの作品は重要なレパートリーとなるべきものである。

英国聖公会の福音的な指導者であるジョン・ストットは、ダドリー＝スミスのケンブリッジ大学以来の友人である。ダドリー＝スミスはジョン・ストットに誘われて、1955年から雑誌「クルセード」Crusadeの編集にあたっている。これは、ビリー・グラハム(Billy Graham)のウェンブレー・クルセードをきっかけに創刊されたフォローアップのための月刊誌である。1990年には、ジョン・ストットの公認伝記を書くように依頼され、２冊からなるジョン・ストット伝（注１０）を書いて、ジョン・Ｃ・ポロック・クリスチャン伝記賞を受賞している。

もう一人の友人デレク・キドナーは「ティンデル旧約聖書註解」(Tyndale Old Testament Commentaries)シリーズや「バイブル・スピークス・トゥデイ」(The Bible Speaks Today)シリーズなどに執筆している旧約学者であるが、音楽の才能にも恵まれており、ダドリー＝スミスに助言を与えたり、ダドリー＝スミスが作詩に当たって彼の著作から示唆を得ることもしばしばあったという。ダドリー＝スミスは自らの創作した歌詩についてコメントする中でキドナーの名を何度か上げている。

聖書同盟の起源は、1867年にジョサイア・スパイアーズ（Josiah Spiers）が始めた児童特別伝道協会（The Children's Special Service Mission）にある。この団体による子どものための特別集会では、親しみやすく肩の凝らない雰囲気の中、みんなで讃美をしたり、視覚教材を用いて楽しく分かりやすい話をしたそうである。やがて、この働きから子どものための聖書通読運動が生まれ、それが大人に拡大し、現在では聖書同盟の働きは140カ国以上に広まっている。このグループから『合唱曲集』Choruses（1921,1938and1959）という讃美歌集が生まれている（注１１）。

ダドリー＝スミスは1967年に、聖書同盟の100周年記念礼拝のために依頼されて"Lord, for the years"という讃美歌詩を書いたが、この詩は後に10冊を超える讃美歌集に収録されることになる。この依頼を引き受けるにあたっては、ダドリー＝スミス自身が聖書同盟の働きから多くの霊的な養いを得ていたことが動機としてあったという（注１２）。

（３）業績

ダドリー＝スミスの讃美歌作詩家としての業績の中で特に重要なのは彼の最初の讃美歌詩集『リフト・エヴリ・ハート』Lift Every Heart (Hope Publishing, 1984)である。ここには彼が讃美歌作詩家としての歩みを始めるきっかけになった「あがめよ、わが魂」を始め、1961-1983年の創作の成果が収められている。さらに、この本には著者自身による42ページに及ぶ前書きが付され、彼自身の生い立ちや讃美歌詩についての考えを知ることができる。ダドリー＝スミスについて知りたいと思う者が、最初に読むべき本である。

また、彼は、休暇を利用して毎年6-8曲の新しい讃美歌詩を書くということを、40年以上に渡って習慣としてきたが、そのようにして書かれた讃美歌詩の数は280曲を越え、『リフト・エヴリ・ハート』の出版後も1996年まで4-5年ごとに新しい讃美歌詩集を出版している（注１３）。

2003年12月には、彼の創作活動の集大成ともいうべき『ア・ハウス・オブ・プレイズ』A House of Praise: Collected Hymns 1961-2001（Hope Publishing）が出版された。ここには、今までの詩集に収められていない50の新しい讃美歌詩を含む285の讃美歌詩が収められている。

彼自身の讃美歌詩集と先にあげたストットの伝記の他の著作としては、ＳＰＣＫの依頼で編集された『ア・フレイム・オブ・ラブ』A Flame of Love: A Personal Choice of Charles Wesley's Verse(Triangle, 1987)がある。この本は、ジョンとチャールズのウェスレー兄弟の回心から250年、そしてチャールズの死から200年を記念して編まれたチャールズ・ウェスレーの讃美歌詩のアンソロジーで、6500編以上と言われている膨大な彼の讃美歌詩の中から138編を選び、８つのテーマに分けて、それぞれのテーマの冒頭に簡単な解説を付したものである。

『ストーリーズ・オブ・ジーザス』Stories of Jesus (Lion Publishing, 1971)は讃美歌詩集ではなく、彼が自分の子どもたちのために書いたイエス物語である。生き生きとした語り口で、イエスが歩いた土地の様子、人々の心の動きを描き出した本書は、子ども向けの『小説聖書』といった趣の愛すべき小品であり、彼の多彩な一面をうかがわせる。

最近の大きな働きとして、ダドリー＝スミスは2000年に出版された讃美歌集『コモン・プレイズ』Common Praise(Canterbury Press, 2000)の８名の讃美歌集委員の一人に名を連ねている。この讃美歌集は、英国聖公会で最もよく用いられてきた讃美歌集Hymns Ancient & Modernのリニューアル版である。また、『コモン・プレイズ』には彼自身の曲

も19曲が収録されている。これはチャールズ・ウェスレーの39曲、J・M・ニールの30曲、アイザク・ウォッツの28曲に次いで多く、ヒム・エクスプロージョンの三羽がらすグリーン（12曲）、レン（4曲）、カーン（注１４）（2曲）の３人の収録曲を合わせたよりも多い曲数である。

２　ジュビラテ・グループ（The Jubilate Group）

ジュビラテ・グループは、60人を越える讃美歌作詩家、作曲家たちの集まりである。ダドリー＝スミスは現在このグループに名を連ねていないが、グループのメンバーたちに大きな影響を与えていることは、ジュビラテ編集の歌集やメンバーたちの著作からうかがい知ることができる。

このグループのメンバーには男性も女性も、信徒も教職も含まれている。また聖公会に属する者もおれば、自由教会の伝統に立つ者もいる。その音楽スタイルも伝統的なものから現代的なものまで非常に幅広い。ただ、大方のメンバーは福音的な信仰に立っていると言うことである。このグループの特徴は、メンバーの各自が自由な創作活動を行いながら、グループとしても多くの歌集を編集しているところにある。

ここで、ジュビラテ・グループに属する主な人物を何人か紹介しておきたい。

マイケル・バーン（Michael Baughen 1930-）はジュビラテ・グループの創設者の一人であり、中心人物である。後にふれる讃美歌集『ユース・プレイズ』や『サーム・プレイズ』では編集者としてだけではなく、作曲者、作詩者としても働いており、『ヒムズ・フォー・トゥデイズ・チャーチ』や『シング・グローリー』でも編集グループの中心的な責任を負っている。讃美歌関係以外にもいくつかの信仰書を執筆している。長くチェスターの主教を務めたが、現在は引退している。

クリストファー・アイドル（Christopher Idle　1938-）は、英国の福音的な讃美歌作詩家として、ダドリー＝スミスに次いで名の通った人物であり、彼の詩は英語圏の多くの讃美歌集に収録されている。また、ジュビラテ・グループの主要な讃美歌集の編集者にも名を連ねている。彼は個人の讃美歌詩集Light Upon the River (1998）を出しているが、作詩家としてだけでなく、讃美歌についての論客としても出版、放送、講演など幅広く活躍している。中世の神学者アルクィンの祈りをもとに作られた詩「永遠の光よ」が『讃美歌21』491番に収録されている。

マイケル・ペリー（Michael Perry　1942-1996）も、ジュビラテ・グループの創設者の一人であり、ジュビラテ・グループの主要な讃美歌集の編集者として重要な役割を果たしている。1993年にはジュビラテ・グループともゆかりの深い牧会支援協会の議長に就任している。ルカ1:68-79をもとに作られた詩「ほめうた歌え」が『讃美歌21』182番に収録されている。彼も個人の讃美歌詩集Singing to God(Hope Publishing, 1995）を出している。

マイケル・セイワード（Michael Saward　1932-）も、ジュビラテ・グループの創設者の一人であり、『ヒムズ・フォー・トゥデイズ・チャーチ』や『シング・グローリー』の歌詩部門の編集者をつとめている。詩篇126篇をもとに作られた詩「捕らわれの民」が『讃美歌21』158番に収録されている。

このグループは非常に充実したホームページ（ホームページのURLは、しばしば変わることがあるので記載しない。ここではキーワード「The Jubilate Group」での検索をお薦めした

い）をもっており、そこにはメンバーの経歴やグループの出版物が掲載されているだけでなく、個々の歌詩や曲についても登録すればダウンロードできるようになっている。また、CCLI（The Christian Copyright Licensing International）という国際的なクリスチャンの音楽著作権管理団体とも提携しており、讃美歌の歌詩や曲をプライベート以外で用いたいときには、手軽に、安価に著作権料を支払って用いることができるようになっている。このシステムは、さまざまな規模、さまざまな形態での使用に対応している。日本の教会でも著作権についての意識がさらに深められ、将来このような形で、教会関係の音楽著作権が管理されていくことを期待したい。

（1）主な歌集

ジュビラテ・グループ自体は出版部門を持たないが、グループの編集による讃美歌集は30冊を超え、それらは英米のさまざまな出版社から出版されている。ここではその中から重要なものを選んで取り上げたい。

●『ユース・プレイズ１』『ユース・プレイズ２』

Youth Praise 1 (Falcon, 1966).　Youth Praise 2 (Falcon, 1969).

『ユース・プレイズ』（最初この書名で出版され、『ユース・プレイズ２』の出版にともない『ユース・プレイズ１』となった）は、ジュビラテ・グループ形成の契機となり、その後のグループの歩みを決定づけた重要な讃美歌集である。編集者のマイケル・バーンは、英国中のいろいろな教会の若者たちのグループを訪れ、現代的な作風で作詩作曲された曲を集めて一冊の歌集に編集した。それらの曲は、限られたグループや地域の中で、コピーした楽譜を見ながら歌われていたような曲である。

マイケル・バーンはこの歌集の出版社を求めていたが得られず、当時、牧会支援協会で出版部門を立ち上げたばかりのダドリー＝スミスが助け船を出し、出版にこぎ着けたという経緯がある。その歌集が当初の予想を遙かに超え、「出版部の小さな印刷機が追いつかないぐらいの勢いで売れて」ベストセラーになり、続いて『ユース・プレイズ２』が出版され、同時に、新しい讃美歌創作に意欲をもつ人たちの交わりが形づくられていった。後に、これらの歌集はミリオンセラーとなる。

収録曲数は１が150曲、２が149曲で、讃美歌の番号は1番から299番まで2冊通しの番号が付されている。

『ユース・プレイズ』は、若いクリスチャンたちがいろいろな集会で使えるように編集された讃美歌集であるが、この歌集が出版された60年代後半は、ビートルズ（1962年デビュー、1970年解散）がアイドル路線を脱し、音楽的な質を追求してレコーディング中心の活動に路線変更をした時期とも重なる。英国の若いクリスチャンたちの間にもビートルズの音楽的な影響は色濃く見られ、この歌集に収められている曲のいくつかも、ビートルズ的なポップグループ系の曲作りになっている。そのようなグループの一つクロスビーツ（Crossbeats）の曲は、インターネットからダウンロードして聞くことができる。

●『サーム・プレイズ』Psalm Praise (Falcon, 1973).

この歌集には我々になじみの深い４声体の讃美歌の他に、チャント形式のもの、ジュビラテ・グループの一員であるノーマン・ウォーレン（Norman Warren　1934-）の考案になるピープルズ・チャント（会衆には難しい部分を聖歌隊やオルガンに委ねて、会衆が歌いやすいよ

うにアレンジしたチャント）、ソロ用の曲、ポップス風の曲など、さまざまな様式で書かれた詩篇歌が150曲収録されている。

巻頭には「なじみの薄いギターコードについての簡単なガイド」がタブ譜付きでついており、ギターコードも音楽的な効果を伴う凝ったものが付されている。

ジュビラテ・グループは、この歌集の他に３つの詩篇関係の歌集を編集している（注１５）。

これらの歌集に収録された曲の中でふさわしいものは、次にあげるより大きな讃美歌集『ヒムズ・フォー・トゥデイズ・チャーチ』や『シング・グローリー』にも収められていく。『ユース・プレイズ』が若者向け、『サーム・プレイズ』が詩篇による歌集と、その目的や内容が限定されていたのに対して、『ヒムズ・フォー・トゥデイズ・チャーチ』と『シング・グローリー』は、礼拝や諸集会でさまざまな年代の人たちに用いられる讃美歌集として作られている。

初めから意図されていたわけではないようだが、まず、いろいろな分野の小さな歌集でレパートリーのすそ野を広げ、同時に編集者たちもそれらの作業を通して見識を深めていく。そして、節目、節目に、その成果の中から良い作品をチョイスして大きな讃美歌集に反映させていく。これがこのグループの強みとなっているように思われる。

●『ヒムズ・フォー・トゥデイズ・チャーチ』Hymns for Today's Church (Hodder and Stoughton, 第一版1982/第二版1987).

1973年に「新しい時代の初めての大型新讃美歌集」を生み出そうという計画が確認され、1982年に『ヒムズ・フォー・トゥデイズ・チャーチ』の第一版が、1987年に包括的表現（後出）を意識した第二版が出版されている。新しい時代ということで意識されているのは、古い英語で書かれた欽定訳聖書（KJV）がほとんど唯一の英語公用聖書だった時代が終わり、The New English Bibleをはじめとする現代英語による新しい翻訳聖書が現れ、用いられるようになったことと、英国聖公会の祈祷書の改訂ということである。そのような状況の中で、教会の中で未だに古いことば使いと様式が残っている唯一の領域が讃美歌であり、新しい時代にふさわしい讃美歌と讃美歌集が求められていたのである。

讃美歌集を巡るその後の状況を見ると、アメリカではヒム・エクスプロージョンの影響下にある初の本格的讃美歌集Lutheran Book of Worshipが1978に、The Hymnal 1982が1985年に出版され、90年代後半からは主要な讃美歌集の改訂が相次いで行われ、新しい創作讃美歌の成果が取り入れられていく。1973年の段階での「新しい時代の初めての大型新讃美歌集」の企画は、確かに時代を切り開くものであったと言うことができよう。

この讃美歌集はHymn SectionとSong Sectionに分かれ、Hymn Sectionに612曲、Song Sectionには32曲が収録されている。

●『シング・グローリー』　Sing Glory (Kevin Mayhew, 1999)

1999年に出版されたこの讃美歌集には「新しい世紀のための讃美歌、詩篇、歌」というサブタイトルが付されており、新しい世紀、新しい千年期の幕開けがはっきりと意識されている。収録曲は698曲に及ぶ。

本書の編集の特徴は国際性にある。本書には、数は決して多くはないがアジア、アフリカ、中南米の曲が国名を明記して収録されている。また、それらの曲には英国の会衆に向けて簡単な解説が楽譜と同じ頁に印刷されており、その一部は英語と原語の歌詩が併記されている。そのことを通して「英国の伝統に生きるクリスチャンたちに、自分たちが世界大の教会の中

の単なる一部分である、というよりはむしろ、現代にあっては小さな一部分（a minority part）であることを思い出して欲しい」（序文）というところに編集者の意図がある。

また、中身の新しさも一つの特徴となっている。本書に収録されている讃美歌作詩家のうち20世紀の後半に属する者たちが70人近くいる。

（２）包括的表現（Inclusive Language）

横坂康彦氏は「ジュビラーテ賛美歌（注１６）による意欲的な創作活動はさまざまな歌集を通してその後も続けられていくが、彼らはヒム・エクスプロージョンとは別に独自の世界を築くことになる」と一定の評価を与えつつも、「彼ら（筆者注：ジュビラテ・グループだけのことを言っているのではない）は教義上の問題から排他的だったり、また逆に彼らの所属教派以外の歌集では用いることのできない内容の歌だったりするなどの弊害もあり、広い層にわたってエキュメニカルに、そして国境を越えて浸透していったヒム・エクスプロージョンの讃美歌とは異なっている」（注１７）としている。そのような、ヒム・エクスプロージョンの讃美歌とダドリー＝スミスやジュビラテ・グループの讃美歌の違いの一つに、包括的表現の扱いがある。

ティモシー・ダドリー＝スミスが、プライベートな讃美歌集を出したときに、エリック・ラウトリーは次のような批判をしている。「彼（ダドリー＝スミス）は、『性差別用語（sexist language）』についての最近の議論といまだに向き合っていないか、そうでなければ、その問題を避けることに決めたようである」（注１８）。

性差別用語の問題は、より広い概念である包括的表現の問題の一部である。包括的表現の問題は、讃美歌詩だけでなく聖書翻訳や式文を始め、およそ私たちの使うすべてのことばに関わってくる。そして、私たちがどのようなことばを使うかということは、私たちの信仰、思想、思考にも深く関わる問題である。

では、包括的表現とはどのような言語なのか。一言で言うと、差別語・不快語がある人々を不快にし、排除する方向に働く言葉（単語）であるのに対して、包括的表現はすべての人を包含しうる言葉（単語）である。

今、この問題を深く論じる紙幅は与えられていないが、二つのことを指摘しておきたいと思う。一つは、私たちがこの問題を考えるときには、『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』（マタイ22:39）ということばを動機として誠実に向きあわなければならないということ。もう一つは、福音が罪の赦しであり、死への勝利であり、弱さや貧しさからの解放であるならば、すなわち、神さまによって不快な状況から救い出されることであるならば、私たちが自分の不快な状況を認めることこそが救いへの第一歩となる。そうであるならば、私たちは不快なことばを全く用いないで福音を語ることはできないということである。

包括的表現に対する関わり方は大雑把に言って３つあると思われる。第一に、問題があるとされる言葉を徹底して排除し、包括的表現と入れ替える立場。例外はあるがヒム・エクスプロージョンの流れはおおむねこの第一の立場であると言えるだろう。特にアメリカではこの立場が強い。この立場を徹底して押し進めると、神学の変革、さらには翻訳以前の聖書のことばへのラディカルな批判にも道を開く場合があることに注意しておきたい。第二は、この問題をあえて無視し、伝統的に使われてきたことばが包括的（inclusive）でなくても、それらをあえて使い続ける立場。これは非常に保守的な立場と見なされる。第三は、この問題の大切さを認識し、聖書のことばや神学の許す限り積極的に受け止めるが、この問題によって自らの神学や思想を変えることには注意深くありたいと考える立場。ダドリー＝スミスを始

め、ジュビラテ・グループに関わる作詩家たちの多くはこの立場に属する。私たちの立場もここにある。

そして、ラウトリーの批評にみられるように、第一の立場から見たとき、第二の立場と第三の立場がほとんど同じように見られてしまうことがあるのは残念なことである。

3　おわりに

ダドリー＝スミスやジュビラテ・グループの業績は、日本では『讃美歌21』に数曲取り上げられ、『讃美歌21略解』（日本基督教団出版局、1998）に解説が載っている他は、横坂氏の『現代の賛美歌ルネサンス』と「現代アメリカの教会歌集〔連載〕14」（『礼拝と音楽』81号）で言及されている以外、ほとんど紹介されていない。しかし、彼らの創作活動やその作品、讃美歌や讃美歌集についての考え方、そして、このグループの組織のあり方やグループの編集による讃美歌集は、私たち日本の福音派にとっても大いに関心のあるところである。今後、さらに本格的な研究がなされることを期待したい。

注

1 Fred Pratt Green（1903-2000） 英国の讃美歌作詩家。彼の詩は『讃美歌21』に4曲収録されている（19、304、448、516番）。

2 Brian Wren （1936-）　英国の讃美歌作詩家。後にアメリカに拠点を移す。彼の詩は『讃美歌21』に6曲収録されている（104、364、413、426、439、563番）。

3 J. R. Watson, An Annotated Anthology of Hymns (Oxford Univ. Press, 2002), P409.

4 本書pp.26-27を参照。

5 Sydney Carter（1915-）英国の讃美歌作家、歌手。『讃美歌21』290番「おどり出る姿で」（Lord of the dance）の作者。

6 Alan Luff, “The Hymn Explosion after 25 Years”, The Hymn 40-2 (1995), p.6.
横坂康彦『現代の賛美歌ルネサンス』(日本基督教団出版局、2001), pp.31-40。

7 Erik Routley （1917-1982）英国の讃美歌作家、讃美歌学者。本書p.28を参照。

8 George Herbert （1593-1633）　英国の形而上詩人、神学者。詩集『聖堂』The Templeは彼の代表作。『讃美歌21』に「道、心理、命」（498番）が収録されている。

9 G. K. Chesterton（1874-1936）英国の詩人、批評家、小説家。ブラウン神父シリーズは有名。『讃美歌21』に「主よ、聞きたまえ」（558番）が収録されている。

10 Timothy Dudley-Smith, John Stott: The Making of a Leader (Intervarsity Press, 1999). John Stott: A Global Ministry (Intervarsity Press, 2001).

11 Nigel Sylvester, God's Word in Young World（Scripture Union, 1984）.
「聖書同盟（Scripture Union Japan）」のホームページにも簡単な歴史が掲載されている。

12 Timothy Dudley-Smith, Lift Every Heart (Hope Publishing, 1984), p.235.

13 Songs of Deliverance (Hope Publishing, 1988). A Voice of Singing (Hope Publishing, 1993). Great Is the Glory (Hope Publishing, 1997).

14 Fred Kaan （1929-）英国の讃美歌作詩家。彼の作品は『讃美歌21』に３曲収録されている（244、375、542番）。

15 Psalms for Today (Hodder and Stoughton,1990). Songs from the Psalms (Hodder and Stoughton, 1990). Responsorial Psalms (Marshall Pickering, 1994).

１６横坂氏はここで「ジュビラーテ賛美歌」（Jubilate Hymns）という名称を使っているが、このグループは3年ほど前からThe Jubilate Groupという名称を一般向けに使うようになっており、ホームページでもThe Jubilate Groupが使われているので、本稿では名称を「ジュビラテ・グループ」（The Jubilate Group）とした。ただし、法律文書やコピーライト表示など公的な場面では、引き続いてJubilate Hymnsという名称が使われるとのことである。

１７横坂康彦『現代の賛美歌ルネサンス』pp.46-47。
１８ Timothy Dudley-Smith, Lift Every Heart, p.6.

St Michael's Singers という英国の合唱団がコンテンポラリーヒムのアルバムを出しています。作者の演奏と聴き比べてください。一つの作品にもいろいろな可能性があることが分かります。

100「栄えを捨てて」
〈St Michael's Singers - From Heaven You Came〉
https://www.youtube.com/watch?v=-iT3eCZLisg
〈Graham Kendrick - The Servant King (From Heaven You Came)〉
https://www.youtube.com/watch?v=_B789G5QY9Q

156「輝け主の栄光」
〈St Michael's Singers - Lord, The Light of Your Love Is Shining〉
https://www.youtube.com/watch?v=hqnEQtwoNqk
〈Graham Kendrick - Shine Jesus Shine (with lyrics)〉
https://www.youtube.com/watch?v=_FuW20MYAK4

359「私の望みは主イェスだけにある」
〈St Michael's Singers - In Christ Alone〉
https://www.youtube.com/watch?v=09Qs7H1jTTw
〈Stuart Townend - In Christ Alone〉
https://www.youtube.com/watch?v=RCeSOY5tisl

78「貧しい馬屋の中」
〈From the Squalor of a Borrowed Stable (Immanuel) - St. Michael's Singers〉
https://www.youtube.com/watch?v=Oq6R4RGNVYM
〈From the Squalor of a Borrowed Stable (Immanuel)〉
https://www.google.com/search?
q=%E3%80%88From+the+Squalor+of+a+Borrowed+Stable+
%28Immanuel%29%E3%80%89&ie=utf-8&oe=utf-8&client=firefox-b-ab